過ちのライゼ

小鳥遊奈鳥。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過ちのライゼ

【Ｎコード】

Ｎ９６７３Ｙ

【作者名】

小鳥遊奈鳥。

【あらすじ】

十三年前のある日、突如世界を闇で覆った日――――通称、黒昼の日。その日を境に世界では能力に目覚める人間が出てきた。しかし、人智を超えた能力を持ったがために忌避されたり差別されたりする能力者たち。そうならないように能力を万人のために生かす神薙学園能力運用部の面々。四月も半ばの頃、一人の男子生徒が神薙学園に転入してきたことで物語は動き始める。学生らしい日常や能力者としての葛藤を描いた能力者系学園モノ。

プロローグ（前書き）

来年、どこかの出版社に応募しようと思って書き温めていた“過ちのライゼ”ですが、まァ現実的に考えて無理だよな……就職するし。

ということでせっかく書いたんだから小説家になろうへ投稿することにしました。

たくさんの方の目に触れてもらえたら嬉しいです（＊´∀`＊）

twitterやってます。

ユーザー名はtakanashi_natorです。

更新情報や執筆状況などをつぶやいていきたいと思います。

他にも小ネタや裏話、他諸々をつぶやいていきたいです。

http://twitter.com/takanashi_nator

感想に評価、誤字脱字の報告などお待ちしております。

プロローグ

世界は理不尽で満ちている。それは、どこの誰が言ったのだろうか……

その言葉を聞いた時はそんなことはない、世界は案外悪くないものだと思えた。家はごく一般的な家庭よりもちょっとだけ裕福で、父と母と兄との四人暮らし。それなりの年頃らしく学業に部活、恋に趣味にと、ちょっと満足いかない時はあっても、充足した日々だった。

けど、世界は理不尽で満ちていると言うのはこの世界の真理なのだろう。

不幸は誰にでも突然襲い掛かるものだ。と、テレビで言っていたけど、それが自分の人生に当てはまるとは思わずに生きてきた。

ニュースキャスターが毎朝届ける不幸な出来事を尻目に学園へと登校するように、同じ日本での出来事もどこか遠い世界で起きていることのように感じていた。

身近な人が事故で亡くなるのも家族の手で殺されるのも、それが自分にもいつか訪れるかもしれないと全く思わなかったわけではないけど、それでも、やっぱりそんないつかは訪れずこともなく、私は平々凡々に生きていくのだろうと思っていた。

それが壊れたのはいつだろう……

父が一番の親友だと思っていた人に騙され、全てに絶望し、楽に

なるためにと自殺した時から？　母が全てに嘆き、得体のしれない宗教を心の拠り所に信奉し始めた時に？　それとも兄が全てに憤怒し、世間では許されない行為に走った時？　もしかしたら私が――――……いや、どれも違う。きっと私が生まれる前からこの世界は理不尽で壊れていたのだろう。

それでも私はこの理不尽で壊れた世界から父や母、兄のように逃げたりすることも出来ずに、ただ自分に嘘を吐いて生きていく。

人から見ればそれも逃げていることになるのだろうけど……

くるり、くるり。

過去が回る。

「最悪な目覚めだわ……」

のっそりと体を起こした少女は、枕元に置いてあった携帯電話を開いて日付と時刻を確認する。

四月十五日の月曜日。時間は六時十五分。

いつも起きる時間よりいくらか早い目覚めに少女は目を細める。

「……ああ、そういえば今日であれから一年が経ったのね……通りで夢見が悪いはずだわ」

一年前の四月七日に少女――――真崎空音が信じてもいない神から、

要りもしない傍迷惑(はためいわく)な能力に目覚めさせられた日。
そして、それは……空音が嘘を吐き始めた日でもある。
「はぁ……」
空音は携帯電話のアラーム機能を消してベッドから起き上がると、着ていた寝巻をベッドに投げ捨て、栗色の髪の毛を靡(なび)かせて浴室へと歩いて行った。
窓の外の天気は快晴。
それは空音の心情とは全く逆の空模様だった。

1

「ようこそ、神薙学園高等部へ。俺はお前が転入する二年A組の担任の来栖川だ。担当教科は生物。それからお前が入部する予定の能運部の顧問でもある。よろしく」

白衣を着た来栖川は手元の書類を眺めながら投げやりな態度で歓迎と自己紹介をする。

「能運部？」

真新しい制服を着た少年――――上倉久遠は聞き慣れない単語に首を傾げる。

「ん？　能力運用部に入部するのがこの学園に入る条件の一つだっただろ」

能力運用クラブ。略して能運部と呼ばれていることを理解した久遠は頭を頷かせる。

「ああ、はい。よろしくお願いします」

来栖川は手元の書類を机の上のバインダーに綴じると席を立った。

「ああ……これからA組のホームルームだから適当に自己紹介を考えておけ」

そして、スタスタと扉の方へと歩いていくので、久遠も後を付いていく。

校舎内はホームルーム前ということもあってどこか騒がしい。階を一つ上がり、二年の教室がある三階に来る。神薙学園では廊下側一面が窓のようで教室内の生徒達からの視線が廊下を歩く久遠たちに注がれた。

若干の居心地悪さを感じた久遠はそれを紛らかすように、扉の上にあるプレートに視線を向けると、そこには二年F組とあるので、普段見慣れない生徒が教師と歩いているので珍しがっているのだろう。

久遠がそんなことを考えていると来栖川の足が止まった。視線を

扉の上のプレート向ければ二年Ａ組の文字。どうやら碌（ろく）に自己紹介を考えないまま、教室に着いてしまったようだ。
教室内では教室の外に来栖川が来たことに気付いた生徒たちが慌てて席に着いているのが見える。
「それじゃ俺が合図をしたら教室に入ってこい」
来栖川はそう言うと扉を開けて教室に入っていった。教室の外にいる久遠に視線を向けていた生徒も来栖川が教壇に立つと、そちらに意識を集中させる。
「突然だが、転入生だ」
前置きもなく投げやりな来栖川の言葉を合図に久遠は二年Ａ組に足を踏み入れる。久遠が隣に来たのを確認すると再び来栖川が口を開く。
「あー今日からこのクラスの一員になる上倉だ。上倉、自己紹介」
「上倉久遠です。よろしくお願いします」
結局、何も考えていなかった久遠の自己紹介はとてもシンプルなものだった。だが、Ａ組の生徒は拍手を持って久遠を迎えてくれた。
「はーい、ちょっといーですか？」
拍手が鳴り止んだ頃を見計らって、ピンクのリボンで髪をポーニーテールにした可愛らしい女子が、小学生並に真っ直ぐ手を上げる。身長も小学生並のようだが……
「俺の授業でもそんぐらいの挙手をしてもらいたいもんだな……で、何だ？　百瀬」
「是非、我々に転入生の上倉くんへの質問タイムを！」
百瀬と呼ばれた女子は来栖川の嫌味を物ともせずに発言する。他の生徒は静かに状況を見守っているが、どうも百瀬同様、好奇心に満ちた顔をしているところを見ると大多数の生徒が質問をしたがっているようだ。
義務教育を終えた高校生にもなると転入生など殆どいない。そもそも神薙学園は初等部からのエスカレーター式だ。外部入学でしか新しい人間が入ってこないのだから、転入生が気になるのも仕方が

ないのかもしれない。
それがわかっていても一クラス三十人分の質問をされると思うと憂鬱な気持ちになる久遠だった。出来ることなら質問タイムは無しにしてもらいたいところだが――――
「少しだけだぞ」
久遠の願い届かず、来栖川は窓際に置いてあったパイプ椅子に座った。教壇に一人残された久遠は嘆息をする。
「それじゃ廊下側から順番に名前と質問してけ」
来栖川の提案により、久遠は全員の名前を知る機会を得た代わりに面倒くさい質問攻めにあうことが決まった。廊下側の一番前に座っていた男子が席を立つ。
「出席番号五番、梅本和樹。そうだな……それじゃ趣味は？」
「読書」
「関川深雪です。上倉君の好きな食べ物は？」
「蕎麦」
「葉山美羽、出席番号は十九番です。えっと……上倉君はどんな本を読むのかな？」
「本なら何でも読む」
その後も当たり障りのない質問が続く中で、先ほど手を上げた百瀬に順番が回ってきた。
「ふっふっふ……この時が来るのを待ちわびていたよ」
何やら芝居掛かった振る舞いで席を立った百瀬に久遠は嫌な予感しかしなかった。周りからは「いけーA組のパパラッチ娘！」やら「いっちゃえいっちゃえ！」などと囃し立てられているのを見れば誰でもそう思うだろう。
「出席番号二十三番、百瀬桃花！　人呼んで神薙学園のパパラッチ桃ちゃん！」
しかも、A組から神薙学園へとグレードアップした看板を背負ってきた。周りからは何故か拍手喝采。百瀬も「どうもどうもー」と手を振っている。

「そんな桃ちゃんが上倉くんに訊ねることは、ズバリ！　現在、彼女はいますかっ？」
　百瀬の質問にA組の女子は目を輝かせて久遠を見ている。男子からは若干のやっかむ視線が送られているが……
「いない」
久遠が投げやりに答えると女子からは短い悲鳴が上がり、男子からは「同志よ！」という野太い声が上がった。
「そっかー、上倉くんって結構イケメンなのに意外だなー」
　百瀬は呟きながら、桃ちゃんのマル秘手帳！　と書かれた手帳に何やら書き込んでいる。
　そこからは百瀬同様に少し踏み込んだ質問も増え、久遠は暗鬱（あんうつ）とした表情でそれらに答えていった。そして、ようやく最後の一人に順番が回る。
「真崎空音。二十一番。……あなた、能力者でしょ？」
窓際の最後尾から一つ前に座っていた空音の質問はいやに断定的だった。周りの生徒も思わずどよめく。
「……」
　空音の質問の真意を測りかねる久遠は初めて黙った。何故そんな質問を思いつき、あまつさえそんなデリケートな問題に触れられるのか、と。
「雄弁な沈黙をありがとう」
　その沈黙から空音は答えを導き出し、席に着いた。沈黙の理由はどうあれ、結局は久遠が能力者なのは変わらない。
「真崎。それはアウトだ……」
今まで静かに見守っていた来栖川が面倒くさそうに口を開いて空音を諭（さと）す。
能力者は普通の人間には忌避（きひ）される存在だ。それは、能力者の持つ能力が大抵は超常的なものだったり常識外のものだったりするからだ。人間は自分と違うものを認めないし受け入れない。そして、それは差別や迫害へと至ることもある。

そんな世の中でも神薙学園は能力者への理解があり、積極的に能力者の受け入れをしている。久遠もだからこの学園へとやってきたのだ。

「上倉君、能力者なんだ……」と誰かがポツリと漏らす。受け入れをしていると言っても、実際は一般生徒との隔(へだ)たりがいくらかあるのも現状である。

「ほら、質問タイムは終了だ。後は休み時間にでも各自でやれ。ああ、それから一時間目の俺の授業は生物室でやるから移動な」

来栖川はパイプ椅子から立つとざわざわと騒ぐ生徒たちに言い放つ。

「それと真崎は俺のところに来い」

呼ばれた空音は移動教室の準備一式を手にして、周りが教科書やノートを慌てて準備している横を通り、来栖川の前に立つ。

「なんですか？」

他の生徒達も準備しながら、廊下の外から様子を伺っている。久遠も空音に多少の興味を持ち、改めてその容姿を見る。

窓から入る太陽光に腰まで伸びる綺麗な栗色がキラキラと輝いているように見える。染めているならば髪質が落ちて天然の潤いが無くなる。輝くように見えるということは栗色の髪は地毛ということだ。女子にしてはそれなりの長身と端正(たんせい)な顔立ちが相俟(あいま)って美人という言葉がよく似合いそうだ。

「真崎、次の俺の授業は出席扱いにしてやるから上倉に学園を案内してやれ」

「何で私がそんなことしなきゃいけないんですか」

「さっきの質問で上倉を案内してくれそうな奴が減ったからだ。能力者の話題っていうのは、扱いが難しいんだから気を使えよ。お前も能力者(おんなじ)なんだからわかるだろ……」

面倒くさそうに喋りながら頭を掻(か)いている来栖川の発言を聞き、期せずして空音も同じ能力者だと知った久遠は、あんたも話題の扱いには気を付けろよ、と内心そう思うのだった。

「あ、なら先生！　私も能力者（おんなじ）！　私も上倉くんを案内しますよー」
そこで、今まで来栖川と空音の会話に聞き耳を立てていた百瀬が目をキラキラさせて話に割り込んできた。
「お前はダメだ。真崎は成績優秀だからまだいいが、百瀬……一年の時の自分の評定を覚えているか？」
「うぐ……で、でも、新しく神薙にやってきた上倉君に空音ちゃんは荷が重すぎると桃ちゃんは思うのですよ！」
「ダメだ。お前は俺の有難い授業を受けるんだ。ほら、行くぞ」
「そんな殺生な～」
来栖川は百瀬を連れて教室を出て行った。他の生徒も慌てて二人の後を追って出て行ったので、教室には久遠と空音だけが残された。

2

教室に取り付けられたスピーカーからは授業開始を告げるチャイムが流れる。そのチャイムが鳴り終わるのを聞き終えてから久遠は空音に話しかける。

「……えっと、真崎さんだっけ……」

「はあ……ええ、そうよ。上倉君」

「これからどうする？」

久遠は明らかに不機嫌そうにため息を吐いた空音に訊ねる。確かにこれは俺に荷が重そうだ……、と考えながら。空音は手に持っていた教科書やノートを置きに自分の席に戻っていく。

「そりゃ……来栖川先生の有難い言いつけを守るためにも、あなたに学園を案内するわよ」

「どうも」

そう言って空音は机に手荷物を置いて教室から出て行ったので、久遠も慌てて後を追いかけて廊下に出る。

「鞄くらい置いてきなさいよ。邪魔でしょ」

それを見ていた空音は久遠が持つ鞄を指差して指摘する。

「いや、俺の席知らないし……」

指摘された久遠は困ったように言う。空音は指先を鞄から自分の席の後ろに佇む机へと変える。

「あそこがあなたの席でしょ。昨日までは無かったから」

久遠は教室に戻って鞄を机の上に置いてくる。

「教えてくれてありがとな」

「別に。あれだけ収拾がつかなくなってたんだもの。来栖川先生が忘れるのも仕方ないしね」

「いや、原因はお前が「お前って言われるのは嫌いなの。やめてくれる」……真崎さんの質問が原因じゃ……どうしてあんな質問を？」

久遠が通ってきた方向とは逆に歩き始めた空音に、久遠は先ほどの質問の真意を訊ねる。空音は前を向いたまま答える。
「人間、第一印象ってのは大事よ。でも、私たち能力者ってのは、そのことが知られただけで周りの態度が変わる。なら初めに能力者って知っといてもらった方が人間関係なんかは構築しやすいと思わない？　そう私は思うけど、あなたの考えが違ったら謝るわ」
空音はそこで足を止めて振り返り、久遠と向き合う。
「いや、確かにな……どうせ能力運用部に入らなきゃいけなかったんだ。それなら最初にバレてた方が傷は浅いかもな。でも、どうして俺が能力者だと？」
久遠は納得したように頷きながらも、新たな疑問が湧き上がった。
「先週の金曜日に来栖川先生が能運部に新しい部員が増えるって言ってたから……学園の能力者は既に全員が所属しているしね」
「ああ、そういうことね。と言うことは真崎さんも能力者でいいんだよな？」
「ええ、ついでに百瀬さんも能力者よ」
「やっぱり……それにしては随分とみんなから慕われているんだな」
久遠は先ほどの百瀬とクラスメイトたちのやり取りを思い出す。能力者は普通の人間には忌避される。そして、それは能力者の人格形成にも大きな影響を与える。大体は人間不信に陥ったり捻くれた性格になったりする。空音は身を翻して再び歩き始めながら言葉を紡ぐ。
「それは百瀬さんの容姿と人柄や人徳のお蔭じゃないかしら。確かに彼女の能力は使い勝手がいいから」
「確かに人柄や容姿は愛されてそうだな。でも、使い勝手のいい能力と百瀬さんの人気にはどんな関係が？」
百瀬の言動や容姿を思い浮かべた久遠は気になったことについて訊ねる。
「私や百瀬さんが所属する能運部っていうのは、能力者が持つ能力を一般生徒のより良い学生生活の為に運用する部なの。そこで、彼

女は一般生徒から大きな支持を得ているわけ」
私はあの能力がもたらすモノは厭(いと)われと紙一重だと思うけど、と空音は久遠には聞こえないぐらいの小声で皮肉そうに付け加えた。
「なるほど。能力者を孤立させないために、か……百瀬さんは一体どんな能力者なんだ？」
「自分で訊ねなさいよ、そういうことは」
空音はそう言い放ち、すたすたと歩いていく。確かに百瀬の言うように取っ掛かり難(にく)い部分はあるが、それなりに面倒見は良さそうだし、訊ねたことにはちゃんと答えてもくれる。そう感じた久遠は空音への評価を改めた。
「そういえば、どこに向かっているんだ？」
「どこにしようかしらね……とりあえず無駄な視線に晒されるのは嫌だから一般教室の前の廊下を歩かないようにしているけど」
久遠が辺りを見回すと確かに一般教室は無く、横の教室のプレートには資料室と書かれている。
「それには俺も賛成だ。もう授業が始まってるしな」
「そうね……あなたはお弁当派？　学食派？　それとも購買派かしら？」
「ん、ああ……前は学食が無かったから基本はコンビニで買い弁だったけど、食堂や購買があるなら教えてくれると有難い」
「わかったわ。食堂と購買は一階にあるからそこへ行きましょう。あまり時間も無いから他に知っておきたい場所をリストアップしといて」
「わかった」
二人は階段を下って一階を目指していった。

その頃、生物室では……
「先生ー、どうして授業を欠席させてまで空音ちゃんに上倉くんを

案内させたんですか？」
　出席を取り終えた来栖川に百瀬が質問をする。他の生徒も疑問に思っていたようで、来栖川に二十八対の視線が集まる。
「ああン、そりゃ能力者同士の方が気兼ねなく……「初対面の上倉くんと空音ちゃんが？」……まあ、何とかなるだろ。どうせ上倉も能運部所属だ。早いか遅いかの違いだろ」
　百瀬の疑問に適当に答える来栖川に生徒は苦笑する。先ほどはざわめいたが、二年Ａ組の生徒たちは学園では能力者に理解のある方だ。それは、百瀬の人気もあるが、空音の能力や他の能力運用部の部員に助けられた生徒も少なからずいるからだ。
「でも、それなら同じ能運部に所属の私でも……「確か百瀬の一年の時の評定平均は……」それだけはやめてー」
　いやー、と叫ぶ百瀬を見て、生物室は笑いが起こった。
「ほら、雑談はこれぐらいにして今期の授業の説明をするぞ」
「それって教室でも良かったんじゃ……？」
「いちいち口を挟むな、百瀬。お前の単位をアヒルから煙突にするぞ」
「ふえ！　二年になってから始まった生物で既にアヒルさん扱い！　しかも、それがあの噂の煙突に！　先生、それはいくらなんでも職権乱用です！」
「あ、いくらバカ桃でも煙突は無かったんだ……」
その言葉に百瀬の隣に座っていた関川がボソッと呟く。
「あー、ひどっ！　みゆみゆまでそんなことを！」
「だ、誰がみゆみゆだ！　このバカ桃！」
　二人はきゃーきゃー、と騒ぎ立てる。それを見ていた来栖川の蟀谷（かみ）に青筋が浮かび始めた。
「あ、二人とも、先生が……」
同じ机に座っていた一人の女子が黒板の前に立つ来栖川を指差す。
二人がギギギッと顔を来栖川に向けるとそこには普段は絶対に見せないだろう満面の笑みを浮かべていた担任の顔。だが、目は笑って

いない。
「そ、それじゃ、ちゃっちゃと授業に入りましょうよ。先生！」
「そ、そうですよ。私たちも来年は受験生だし、今からしっかり勉強しておかなきゃ……」
「そうだな、関川の言う通りだ。そんな勉強熱心な二人には放課後、特別に課題（プレゼント）をやるからちゃんと顔出せよ」
「「そ、そんな～」」
二人の叫びが生物室に木霊（こだま）した

3

二人は数百人が一度に食事を取れそうな食堂へとやってきた。
「ここが食堂で券売機はあれ。他にも購買や自販機があそこにあるわ」
空音が順に指差す先には四台の券売機と購買、数台の自動販売機が並んでいた。久遠はひとまず券売機へと足を運ぶ。
「上倉君？」
「学食の値段を確認しようと思って。多くはない生活費でやりくりしないといけない身なんでね。……お手頃な値段だな。」
「それは学食だもの。それから味とボリュームにも定評あるわよ」
券売機の前でメニューを品定めしている久遠の隣に空音もやってきた。
「そりゃ嬉しい知らせだ」
そう言って財布を出して券売機にお金を投入する久遠に空音は訝しげな視線を送る。
「食堂はまだ営業してないわよ？」
「いや、食堂はよく混むって聞いたから先にって思ってね」
「ああ、なるほど。初心者のくせに高等技術を使うのね」
苦笑しながら答える久遠を面白そうに見やる空音。最初に感じた不機嫌そうなオーラは、もうどこにも感じられない。
「初日から食いっ逸れるのはごめんだからな。真崎さんのオススメって何かある？」
「そうね……月曜日の日替わり定食はいつもより少しだけ豪華ね」
「んじゃ、それで」
久遠は日替わり定食のスイッチを押して食券とお釣りを取り出す。
「はい」
「ん、これは？」
久遠は取り出した食券を空音に差し出す。それを不思議そうに眺

める空音。
「学園を案内してもらっているお礼、かな」
「ああ、そういうこと。でも、今日は珍しく早めに目が覚めたからお弁当なの。気持ちだけ受け取っておくわ」
そう言って空音は今まで表情に乏(とぼ)しかった顔に微笑(びしょう)を浮かべた。
久遠はその微笑に一瞬、見蕩(みと)れる。
「なんだ、少しとっつき難いって思ってたけど、真崎さんも笑えるのな」
にかっと笑ってそう指摘する久遠に、空音は少し顔を赤らめて反論する。
「そ、そりゃ私だって人間よ。笑ったりもするわ」
「それもそうだ」
「そう言う上倉君。あなただってホームルームの時は随分と無表情だったわよ」
簡単に納得する久遠に今度は空音が指摘し返した。久遠は苦笑いしながら答える。
「初めての環境で緊張してたんだよ」
「どーだか……」
空音はため息を吐く。久遠はそれを尻目に自動販売機へと歩いてく。
「真崎さんは珈琲派？　紅茶派？　それともお茶派？　意外に炭酸派だったりする？」
「強いて言うなら珈琲派ね。紅茶も好きだけど……何かしら、食券の代わりに飲み物でも奢ってくれるの？」
面白そうな顔をして、空音は自動販売機の前に立つ久遠の横に並ぶ。
「ただ聞いただけ。ちなみに俺も珈琲派。気が合うね」
「あ、あなたね～」
「ははっ、冗談。どれでも好きなの選んでよ」
久遠は自動販売機に五百円玉を入れて空音に正面を譲る。

「全く……」
空音は自動販売機の前に立ち、少しの間考え込むと、釣り銭のレバーを押す。
「へ？」
「私、ここのメーカーの缶コーヒーは好きじゃないの」
そう言って空音は五百円玉を取り出すと、隣の自動販売機にその五百円玉を投入し、虹色に輝いてパイプを咥えるオッサンが描かれた缶コーヒーを選ぶ。
「さいですか」
「上倉君は買わないの？」
取り出し口から缶を取り出した空音は、振り向き様に訊ねてきたので久遠は悩みながら手を伸ばす。
「そうだな……んじゃ俺はこれにするか」
久遠は最上段にあった無糖の缶コーヒーのボタンを押す。
「ちょっと……ち、近いわよ」
「あ、悪い」
空音が避ける前に手を伸ばしたので二人の距離は大分近かった。空音は若干頬を染めながら文句を言った。微妙な雰囲気が流れる空間に割って入る声が食堂に響いた。
「お前ら！　授業はどうした？」
二人が食堂の入り口に目をやると、そこには年配の教師がこちらを睨(にら)み付けながら歩いてくるのが見えた。
「……面倒くさいのに見つかったわね」
空音はボソッと小さな声で呟く。
「お前は二年Ａ組の真崎だったな。そっちのお前は見かけん顔だな。何年何組だ？」
教師は二人を見定めるように眺める。空音は教師と目を合わせないようにして黙り込んでいる。久遠は黙り込んでいても仕方ないと思い、教師の質問に答えることにする。
「本日付けで二年Ａ組に転入してきた上倉久遠です。あの、あなた

は？」
「俺は数学教師の葛城(かつらぎ)だ。生徒指導もしているがな。……そうか、お前が新たにこの学園にやってきた能力者ってのは」
葛城は久遠たちのことを明らかに蔑(さげす)みの目で見る。その目を見た久遠の表情は一気に冷めていく。どうやらこの葛城という教師は能力者に対して強い偏見を持っているようだ。
「転入初日から授業をサボるとは、これだから能力者は……どんな思考回路をしているんだ？」
葛城は嫌味たらしくグチグチと言葉を羅列(られつ)し始めた。それに対して今まで黙っていた空音が口を開く。
「お言葉ですが、私たちは担任で一時間目の生物担当の来栖川先生から許可を貰って、上倉君に学園を案内していただけです。別に授業をサボっていたわけじゃありません」
屹然(きつぜん)とした空音の物言いに一瞬怯んだ葛城だが、すぐさま反撃してくる。
「なら、どうして自販機の前であんなに密着してたんだ？　それに手に持ってるものは何だ？　来栖川先生は他の生徒が授業をしている間に仲良くお茶でもしていろ、とでも言ったのか？」
「そ、それは……」
葛城の指摘に空音は言葉に詰まる。密着していたのは誤解だが、それを証明することは出来ないし、手に持っている缶コーヒーについては確かに葛城が言っていることの方が正しい。空音が何か良い言い訳を、と考えていると今度は久遠が口を開く。
「密着していたのは真崎さんが退く前に自販機のボタンを押したからで他意はありません。それと缶コーヒーを授業中に買っていたのは、スミマセンでした。真崎さんが来栖川先生の指示とはいえ、貴重な勉学の時間を俺の為に割いてくれたのでそのお礼に、と俺が買ったものです。真崎さんには何の責任もありません。俺の配慮が足りませんでした。転入初日から葛城先生のお手を煩(わずら)わせてすみませんでした！」

久遠が理路整然（りろせいぜん）と事情を話した後に深々と頭を下げると、葛城も戸惑っているようだ。
「だ、だがな……」
それでも言葉を紡ごうとする葛城に空音が再び口を開く。
「私も反省してますので今回は……これ以上突っかかってくるならアホ部長と百瀬さんをけしかけますよ。」
最後に空音がボソッと呟いた言葉に葛城の顔が青くなる。
「お、お前は……きょ、教師を脅そうというのか？」
「私、お前って言われるのは嫌いなんですよね……それに、葛城先生だって私の能力を知らないわけじゃありませんよね？」
「チッ……今回はこれ以上言わんが、次は無いと思え、化け物共」
葛城はそう言い捨てて食堂を後にしていった。二人はその後ろ姿をただ眺める。
「神薙は能力者に理解あるって聞いてたんだが、ああいった教師もいるんだな……」
「そうね……いけ好かない先生だけど、ああいった先生も必要なんじゃない？　最後の言葉はムカつくけど。……何が化け物共よ！……でも、私たちは学生なんだから、いつかはこの神薙を卒業するわ。そして、大学に進学するなり社会に出るなりすれば、葛城のような手合いは沢山いるわ。そんな時に困らないようするためには丁度いい予行練習よ」
まあ、犬に噛まれたと思いましょう、と言い放つ空音に苦笑する久遠。空音は振り向いて自動販売機に近寄ると取り出し口から缶コーヒーを取り出した。
「はい、上倉君の缶コーヒー」
「あ、ありがと」
久遠は空音が差し出す缶コーヒーを受け取る
「はあ、それにしても転入初日から葛城に目を付けられるとは、上倉君もツイてないわね。どうせ能力者ってだけで目を付けられるから、早いか遅いかの違いだけど」

空音は自分の缶コーヒーのプルタブを開けて一気飲みをした。
「ご、豪快だな……」
「ふう、本当に一度ぐらいはあの二人をけしかけようかしら？」
『部長はどうだか知らにゃいけど、桃ちゃんとしては先生と問題を起こす気にはにゃらにゃいかにゃー』
独り言のように呟く空音の上――――自動販売機の上から声が聞こえてきた。
「へ？」
「百瀬……さん？」
二人が自動販売機の上に視線を向けると、そこには顔を掻いている黒猫がいた。
『はーい。みんにゃの桃ちゃんでーす。それにしても、ちょこーっと心配して二人の様子を見に来てみれば……いやー随分と仲良しさんにゃってるね！　桃ちゃんびっくりだにゃ』
「百瀬さん、あなた……いつから尾行してたの？」
答えようによっては……と続く空音から何か黒いオーラが出ている。空音としては、いつもの自分と違ったことは重々承知している。それをネタに百瀬が今まで以上に懐いてくるのを遠慮したいところなのだが……
そんな空音の心情はいざ知らず、黒いオーラを発する目の前の少女から久遠は一歩後ずさり、黒猫は暢気に欠伸をしている。
『んー、二人が廊下に出た頃からだにゃ』
「ほぼ全部！」
『にゃー、空音ちゃんの珍しい姿が見れて楽しかったにゃー』
「っ！　三味線にしてやる！」
ケラケラと笑う世にも珍しい黒猫に本気で飛びかかろうとする空音を、後ろから羽交い絞めにする久遠。それを見てさらに笑う黒猫に、空音がさらに暴れた。
「ちょ、落ち着け！　あれ、本当に百瀬なのか？」
『違うにゃ、この仔とちょこっとばかり精神を共有してるだけだに

や。だから、この仔を三味線にするのはちょっと勘弁にゃ』
「……それが百瀬の能力なのか？」
困ったそうな顔をする黒猫に久遠は訊ねる。
『そうにゃ。これが桃ちゃんの能力……動物縁（アニマルリンク）にゃ』
「動物縁（アニマルリンク）……動物と精神を共有させる感じの能力か……？」
『まあ、大体それで間違いにゃい……にゃ！　先生？　今ちょっと取り込み中にゃのに～、ふにゃ！』
「百瀬？」
突然取り乱したかと思うと、黒猫はひょいっと自動販売機から飛び降りて食堂から出て行った。
「……えっと？」
「ちょ、もういいから離して！」
久遠は空音の羽交い絞めを慌てて解く。
「あ、悪い」
「百瀬さんとのリンクが解けたんでしょ。大方、来栖川先生に授業中能力を使ってるところがバレたんでしょ。……いい気味だわ」
最後にボソッと呟いた空音の声が聞こえた久遠は、少し戸惑った後に思い切って訊ねる。
「もしかして、百瀬のことが嫌いなのか……？」
「嫌い……どうかしら、苦手なのは確かね。能力者でありながら明るい性格にあの人気……どうあっても私と真逆な百瀬さんが羨（うらや）ましいのかもね。そして、それは――――」
――――妬みと紙一重……
空音が区切った言葉の先に、そう続く気がした久遠は少し考えて口を開く。
「でも……羨ましいって思うのはさ、自分もそうなりたいと思うことだろ？　まずは仲良くしてみたら？　向こうは大分、真崎さんに歩み寄ろうとしてるみたいだしな」
明るめに話す久遠の言葉を聞いた空音は俯（うつむ）くと、かろうじて聞き取ることが出来るぐらいの声で喋り始める。

「そうかもね……でも、彼女の近くは暖かくて眩しすぎるの。私は嘘を吐いて逃げた人間だから……」
「え？」
久遠が空音に言葉の意味を訊ねようとすると、授業終了を告げるチャイムが食堂に鳴り響いた。その音が止むと空音は顔を上げて歩き始める。一瞬見えたその顔は、今までのような表情に乏しい顔だった。
「チャイムも鳴ったし教室に戻りましょう。運の悪いことに次の時間は葛城先生の数学なの。だから、もし遅れようものなら……また嫌味を言われるわ」
「あ、ああ」
突然の変化、いや……最初の頃に戻った空音に戸惑う久遠。空音はそんな久遠の戸惑いなど気にもせず、近くにあったゴミ箱に空き缶を捨てる。
「もし、まだ見たい場所があったなら昼休みか放課後にでも案内してあげるわ」
そして、空音はすたすたと食堂の出口へと歩いていく。久遠もただその後ろを付いていくしかなかった。

4

教室に戻ると、何故かクラスメイトに受け入れられていた久遠は、各教科の間にある休み時間の度に机の周りを包囲された。主に百瀬が率先していたが……

昼休みには男子数人に食堂へと連行されたり、事前に買っていた食券について問い詰められたりと、ごく普通の転入初日を過ごした。

あっと言う間に放課後になった久遠は、帰宅したり部活に行ったりするクラスメイトを見送る。教室の中には現在三つの人影。

「あなたも随分と人気者のようで……」

「転入生だからだろ。動物園のパンダはきっとこんな気分だ」

前の席で横向きに座りながら廊下側の窓を眺める空音の言葉に、久遠は机に突っ伏しながら皮肉で返す。

そこに、ピンクのリボンで結んだ髪を尻尾のように揺らしながら、もう一つの影が近づいてきた。久遠も机から起き上がり、空音と同様に横向きに座る。

「何て言うか……改めまして、百瀬桃花だよ。趣味は情報収集。空音ちゃんと同じで能力運用部に所属してて、新聞部にも所属してるよ。能力は動物縁（アニマルリンク）！　よろしくね♪」

満面の笑顔で自己紹介をする百瀬は手を差し出してきた。久遠も一瞬躊躇したが、すぐにその手を握った。

「俺も改めて、上倉久遠。二人と同じで能力運用部に入る予定だ。よろしくな、百瀬」

「んもー、同じ能運部の仲間なんだし……百瀬って名字じゃなくて名前で呼んでよ～、なんなら桃ちゃんでもいいよ！　久遠くん」

やたらニコニコして久遠を圧倒させる百瀬。そんなやり取りを冷めた目で見つめる空音。久遠は目を瞑（つぶ）って嘆息をする。

「わかったよ……これからよろしくな、桃花」

「よろしくね♪　それじゃあ、これから部室に行こうよ。他の部員

と顔合わせしようよ！」
「わ、ちょっ！？」
繋いでいた手をいきなり引っ張られた久遠は慌てる。それに構うことなく百瀬はその小さな体のどこにあるのかわからない力でグイグイと教室の扉まで引っ張る。
「あ、鞄忘れてた」
ふと思い出したのか、百瀬はパッと手を放して自分の席に戻っていく。解放された久遠も自分の席へと鞄を取りに戻る。
「真崎さんは行かないの、部室？」
久遠は鞄を手に取りながら不機嫌そう空音に訊ねる。
「行くわよ。……それから私も同じ能運部の仲間なんだから、さん付けはいらないわ。久遠君」
空音はそう言うと鞄を手に取って教室の出口へさっさと歩いていく。その後ろ姿に久遠は一瞬考え込んで声をかける。
「一緒に行かないのか？　空音」
「ええ、図書館に本を返してから行くわ」
空音は久遠の言葉に振り返って答える。その時の表情は穏やかな微笑みだった。空音の理由を聞いた久遠は慌てて追いかけた。
「あ、図書館？　なら、本を返しに行くついでに俺も連れてってくれないか？」
「え？」
久遠の言葉が意外だったのか首を傾げる空音。
「俺の趣味、読書。質問タイムの時に言った」
「そういえば……」
「それにさっき、見たい場所があったなら昼休みか放課後にでも案内してくれるって言ってたよな」
「……そうね、じゃあ図書館に行きましょうか」
自分の言動を思い出した空音は納得して頷いて教室の扉に手をかける。
「あ、桃花はどうする？　一緒に図書館行くか？」

そこで、久遠は思い出したかのように振り返って百瀬に声をかける。久遠の後ろでは今まで穏やかな微笑みを浮かべていた空音の表情が少しだが曇る。
「……桃ちゃんは本読むのが苦手だから遠慮するよ。先に部室行って待ってるね♪」
それを見た百瀬は苦笑しながら答える。空音は久遠の腕を強引に取る。
「行きましょう、久遠君」
「あ、ああ……また後でな」
「ばいば～い」
再び引っ張られる久遠を面白い物でも見るかのような表情で見送る百瀬。もう教室には百瀬しかいない。
「いくら動物縁（アニマルリンク）があって動物と仲良しでも、空気読まないおバカさんは馬に蹴られるんだよ？　久遠くん」
誰に言うでもなく百瀬は呟く。
「それにしても……あの空音ちゃんがね～、随分と久遠くんのことを気にしてるみたいだね。うちの学園の能力者は良くも悪くもみんな濃いからな～、これは……来栖川先生の作戦勝ち？　いやいや、ただの偶然だよね。」
腕を組みながら頷いていたかと思うといきなり首を横に振り始める百瀬。もし、誰かが教室を除けば変人扱いされることだろう。だが、そのレッテルもあの百瀬桃花ということで納得されるだろうが……
「久遠くんも初めは随分と無愛想だったけど……今日一日ふたを開けてみれば大分クラスに馴染めたみたいだし、それも空音ちゃんとのやり取りが大きいよね～。ハッ！　やっぱりこれは先生の目論見通り？　う～ん」
最後の自分の考えに目を瞑って首を傾げる百瀬。何度も唸ってようやく目を開ける。
「部長たちはどう思いました？　久遠くんのこと」

そして、誰もいないはずの教室に向かって問いかける。すると何も無い空間から二人の男子がスーッと現れた。背の高い方の男子は金髪にピアスをいくつか付けて派手な装いだ。もう一人の男子は真新しい制服を着ていて、額(ひたい)には何故かアイマスクがあり、下手くそな字でゴメンナサイと書いてある。

「……お似合いなんじゃね？　で、どうしてオレらがいるってわかったんだ、百瀬」

「気付いたのは黒猫と動物縁(アニマルリンク)してた時ですよ。猫なんかは音に敏感ですしね。それにしても……部長、ホントに一日中久遠くんのことを張ってたんですか？」

「……あ！　お前、鎌掛けたなっ！？」

金髪の男――――能力運用部の部長が大げさに叫ぶ。

「そりゃ……黒猫と動物縁(アニマルリンク)している時ならまだしも、素で清澄(きよすみ)くんの遮断包陣(カットフォアラップ)を把握なんか出来ませんって」

ケラケラと笑う百瀬を見て、部長が考え込む。ちなみにこの三人は中等部からのエスカレーター式である。中等部でも能力運用部に所属していたので付き合いは長い。

「やっぱり、清澄の視覚だけじゃなくて聴覚も遮断しておくべきだったか……」

ブツブツと独り言のように喋る部長の言葉を聞いた清澄の顔が血の気を失って青くなっていく。

「そ、そんな無茶ですよ！　ただでさえ半日も視覚を遮断された状態で連れ回されて、精神疲労が半端ないのに、聴覚まで封じられたら……ゆ、誘拐されてる人質と変わらないじゃないですか！」

「じょ、冗談だ。だから落ち着け、な」

普段見せない後輩(きよすみ)の剣幕に狼狽(うろた)える部長。

「うぅ……」

「あ～、清澄くん泣かせたー、優月(ゆづき)先輩に言っちゃおうかな～？」

「な、泣いてません！」

「ゆ、優月に言うのだけは勘弁してくれ！」

二人が叫ぶのを聞いて、百瀬はニヤリと笑う。それなりに長い付き合いから二人は、その顔が何かを企んでいる時の顔だと知っている。

「でも二人とも……今日一日中久遠くんや空音ちゃんに張り付いてたよね。それから、部長は清澄くんを丸々一日サボらせた上に遮断(カットフ)包陣(オアラップ)を使わせたよね。そのことを久遠くんや空音ちゃん、優月先輩に黙ってて欲しかったら……」

「「欲しかったら？」」

ゴクリと息を飲む二人。

「購買でお菓子とジュースを買ってきて！　モチ部員分。部長千円分の清澄くん五百円分ね♪」

「へ、何？　パーティーでもすんの？」

「イエス！　久遠くんの歓迎パーティーでーす！」

部長の疑問に何故か諸手を上げて万歳をする百瀬。清澄はその姿を見て微笑む。

「桃ちゃん先輩も好きですね、そういうの」

「まーねー、で、これが桃ちゃんの分」

お財布から硬貨を一枚取り出してピンッと弾く百瀬。硬貨は綺麗な弧を描いて部長の手に吸い込まれた。

「五百円玉？　お前も金出してくれるのか、百瀬？」

「いえーす。桃ちゃんも空音ちゃん怒らせてるんで……」

ナハハ、と笑う百瀬に苦笑する部長。

「確かにな……それじゃ清澄、行こうぜ」

「あ、はい」

教室を出て行こうとする二人に百瀬は後ろから声をかける。

「あ、ちなみにこれは私が主催になります」

「へ、オレらの手柄は無し？」

「だって、久遠くんや空音ちゃんからしたら二人の犯罪行為(ストーカー)を知らないわけだし、二人の名前出したら逆に怪しまれますよ？」

「た、確かに……」

特に空音は部長の性格や清澄の遮断包陣（カットフォアラップ）を知っているので尚更である。
「ということで、よろしく～」
「はいはい……」
楽しそうに手をひらひらと振る百瀬に、適当な返事を返して歩き始める部長。
「あ、部長」
「あン？　まだ何かあるのか？」
教室を出ようとしたところで百瀬に呼び止められた部長が振り返る。そこにはいつになく真剣な表情をした百瀬がいた。
「私も面白いことは大好きな人間だから強く言えませんけど、流石に授業サボるのは拙（まず）いですって。ただでさえ私たちは危ういんだから……」
「……葛城か？」
食堂での久遠たちと葛城のやり取りを思い出した部長の言葉に百瀬は首を振る。
「それもそうですけど、生徒会にも気を付けた方がいいですよ。神楽（かぐら）先輩はもういないんですから……」
「……そうだな。それに今の生徒会長は……ハァ、どこで狂ったのか。いや、最初からか……」
百瀬の言葉に部長は声を落とす。今はもういない一人の女性を思い出す。いつも笑顔で真っ直ぐな女性だったな、と……そして、自分と同じクラスの生徒会長を思い浮かべた部長は溜息を吐く。
「……だから、少し自重して下さいよ」
「あいよ」
部長はそれだけ言い残して教室を後にする。清澄も百瀬に一礼してその後に付いていった。百瀬も鞄を手に取り、廊下に出る。
そして、沈んだ空気を振り払うように仲間の集まる部室へと向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9673y/

過ちのライゼ

2011年12月2日00時52分発行